

パトリツィア・ヤネチコヴァ Patricia Janečková に花束を —若き歌姫の死とメディアの光—

伊藤 英一*

- 1、若き歌姫の死を悼んで
- 2、オストラヴァそしてチェコの花が世界へ
- 3、小荘厳ミサ曲の小天使として
- 4、モラヴィアの空を見上げて
- 5、ビロードの歌声はアクセス禁止の国境を越えて
- 6、パトリツィアの闘病に花束を
- 7、天使の翼とメディアの光

1、若き^{ラディーヴァ}歌姫の死を悼んで

「悲しいニュースがチェコのクラシック音楽界にもたらされました。歌姫^{ラディーヴァ}パトリツィア・ブルダ・ヤネチコヴァが25歳で早世したのです。」⁽¹⁾

2023年10月8日、チェコ放送傘下の国際プラハ・ラジオのスペイン語放送は、その1週間前の10月1日、日曜日に逝去した若き歌姫を悼んで31分8秒の追悼音楽番組を放送した。輝かしい未来を約束されたかに思われた、歌姫パトリツィアの成功への飛翔が、余りにも唐突に中断されてしまった痛みが伝えられた。

どこまでも澄み切った、しかし優しいふくよかさにつつまれたソプラノで、彼女が朗唱するヨゼフ・ハイドン作曲のサルヴェ・レジナ^{S a l v e r e g i n a}とアントニオ・ヴィヴァルディによる同曲名のサルヴェ・レジナが流された。ハイドンおよびヴィヴァルディの2大作曲家の手になるサルヴェ・レジナが捧げられた聖母マリアの優しさとパトリツィアの歌声が渾然一体となったような深い憐れみを感じさせる時空間となっていた。

サルヴェ・レジナは聖務日課の終わりに歌われることが多い聖母讃歌とか元后讃歌と呼ばれる聖歌であるが、パトリツィア・ヤネチコヴァが古楽器を主体に編成されたコレギウム・マリアヌムをバックに朗唱する音の響きが素晴らしかった。

そんなスペイン語放送だけでなく、10月8日の国際プラハ・ラジオは、フランス語、ドイツ語、ロシア語、英語の放送でも、多少の編集上のヴァリエーションを加えながらも、いずれも30分前後の枠でパトリツィアの歌声と人となりを紹介する追悼音楽番組を流した。

*いとう えいいち 元日本大学法学部新聞学科 教授

フランス語放送⁽²⁾では、スペイン語放送よりも多少ポピュラーな話題と曲も選ばれており、番組はパトリツィアが12歳だった2010年に歌った「Time to Say Goodbye」で開始された。これは、チェコおよびスロヴァキア両国のテレビ会社合同開催によるコンクールであるタレントマニアで120万票を得て、1万人の参加者から勝ち抜きパトリツィアが優勝⁽³⁾した時のものである。もっとも、それは冒頭のさわりのイントロだけで、パトリツィア・ヤネチコヴァへの追悼番組にふさわしい、彼女の歌う聖歌をメインに置く流れに直ぐ切り替えられたのではあるが。

パトリツィア・ヤネチコヴァ (Patricia Janečková) は、スロヴァキア人の両親の下、ドイツのバイエルン州ミュンヘンで、1998年に誕生した。しかし、生後3ヶ月で、父がチェコのオストラヴァに本拠を置くヤナーチェク・フィルハーモニー管弦楽団のコントラバス奏者として赴任した為、一家もオストラヴァに同行。以来、パトリツィア・ヤネチコヴァは25年の生涯を乳癌により閉じざるを得なくなった2023年10月1日迄、大半の時をオストラヴァで過ごしたのだった。彼女は昨年2022年2月に癌との診断を受け、苛酷な闘病生活に入ることを公表していた。亡くなる3ヶ月前となった昨年の6月には、スロヴァキアの俳優ヴラスティミル・ブルダ (Vlastimil Burda) 氏と念願の結婚、パトリツィア・ブルダ・ヤネチコヴァ (Patricia Burda Janečková) と新夫ブルダの姓も織り込まれた名前と変わった。

フランス語放送では、2010年のタレントマニアに出場した時の思い出として、「歌うのが好きだったので、勝ち負けは大事ではなかった。未だ、子供だったこともあり、優勝した後は、カメラやインタビューに慣れていないせいで、大変だった。内気だったし、大人の人達とどう話して良いのかも判らなかった」との述懐も紹介している。

その後で、パトリツィアの本領発揮の分野である、教会での歌声を流しての、30分14秒の放送時間であった。

ドイツ語放送⁽⁴⁾では、彼女がドイツで生まれたものの、オストラヴァで成長、ヤナーチェク音楽院で学んだことに触れた後、オストラヴァにあるモラヴィア・スレスコ (シレジア) 国立劇場でレナード・バーンスタインの「ウエスト・サイド物語」に出演、マリア役で喝采を浴び、来シーズンの主役となる演目も予定されていた彼女の死を伝えた。

急逝した彼女の美しい歌声を思い出^{よすが}す縁としてと、2019年に南モラヴィアのユネスコ世界遺産レドニツェ＝ヴァルティツェ (ドイツ語ではアイスグループ＝フェルトツベルク) で開催された古楽器フェスティバルで彼女がコレギウム・マリアヌムと共演した折の録音^{よすが}が流され、29分56秒の番組となった。

ロシア語放送は「オペラ歌手の^{スター}星が消えた⁽⁵⁾」と報じ、2年にわたって癌と戦って亡くなった若いパトリツィア・ブルダ・ヤネチコヴァの死が、チェコ共和国に衝撃をもたらしたと伝えた。2014年ローマで開催された国際典礼音楽歌唱コンクールで優勝、2016年にはチェコ・ボヘミア西部の温泉都市カルロヴィ・ヴァリ (ドイツ語名；カールスバート) で開催されたドヴォルザーク歌唱コンクールで三つの賞を受けたパトリツィア・ヤネチコヴァを追悼した30分01秒の番組であった。

英語放送は、「日曜の半時間、今日の音楽の時は、少しほろ苦い^{a bitter sweet}ものです」と前置き、「オペラ界

の輝く新進の星、パトリツィア・ブルダ・ヤネチコヴァは、25歳で癌に倒れました⁽⁶⁾として、いきなり彼女の歌うサルヴェ・レジナを聴かせていた。番組は30分13秒で終了したが、最後の視聴者への慰めとして、「25歳だったが、彼女は録音・録画を永続的遺産として残してくれた」の言葉で締め括られた。

とはいえ、ハード媒体での記録は、CDが12年ほど前、タレントマニア優勝時に出されたものが一枚とクリスマス・ソングを他の奏者と共に歌ったものが一枚、加えてスロヴァキア語の童話朗唱が一枚あるのみで、最新の録音・録画技術を駆使したものが残ってくれていたらと切に願いたい。

チェコの国際プラハ・ラジオの追悼音楽番組からは、スロヴァキア人の両親に守られドイツで生まれたパトリツィアが、育ったチェコで暖かく迎えられ、惜しまれつつ亡くなった悲しみと哀悼が伝わっていた。そこには、国籍や国境の制約が全く影を落とさない空気感も感じられた。

同時に、パトリツィアへの追悼音楽番組であり、30分前後と時間の枠がありながらも各々の言語による番組の内容と選曲には差異があり、時間のずれに関して柔軟性があり、編成上の自由に幅があることにも、興味が持たれる番組となっていた。

尚、パトリツィア逝去の翌々日、2023年10月3日の国際プラハ・ラジオは、その3日後の金曜日6日に開催されるレドニツェでの音楽祭⁽⁷⁾は、パトリツィアに捧げられると報じていた⁽⁸⁾。ちなみに、レドニツェはドイツ語ではアイスグルプと呼ばれ、リヒテンシュタイン家ゆかりのワイン畑と史跡で有名なところである。

また、チェコ放送 (Český rozhlas ; ČRo) のデジタルによるクラシック音楽チャンネルである ČRo D-Dur は、2023年10月25日水曜日の午後8時から「Zpívá Patricia Janečková (パトリツィア・ヤネチコヴァは歌う)」とのタイトルで、4時間に及ぶ長時間番組を編成放送した。「25歳で早世したパトリツィア・ヤネチコヴァを偲ぶ最良の手立ては、録音を通して」と、ラジオ放送用録音ストックからドヴォルザーク歌唱コンクールに於ける彼女の歌声等⁽¹⁰⁾を選曲しての番組だった。前半はバロック音楽を中心に取上げたが、後半に入ってから、パトリツィアが素晴らしい声を披露しているロッシーニの小荘厳ミサ曲 (本稿3で取上げる) 全曲を紹介した。

続いて、一昨年 (2022年) にスプラフォンのレーベルで発売されたCDから、パトリツィアが歌ったクリスマス・ソングとして「Tichá noc」^{テイハノス}を含む3曲を選び番組を閉じた。「Tichá noc」は、「静かな夜」との意味で、日本でも「きよしこの夜」としてお馴染みである。ザルツブルク近郊のオーベルンドルフで1818年のクリスマスに初演された賛美歌「Stille Nacht」^{シュティレナハト}は、オーストリアの無形文化遺産としてユネスコが2011年に指定しているが、ボヘミアやモラヴィアでも19世紀半ばからチロル民謡のように愛唱されて来た。

チェコ放送の音楽チャンネル名である「D-Dur」とは「ニ長調」を意味している。同時に、Dは神^{D^eu^s}の頭文字あることから、D-Durとは神^{D^eu^s}の長調、即ち「神の調べ」を示唆しているのであろう。オーストリア近辺では、ヴィーン・フィルハーモニー管弦楽団を、そのドイツ語名^{ディ ヴィナー フィルハルモニカー}「Die Wiener Philharmoniker」の冠詞Dieと「ヴィーン」の意味するWienerをリエゾン風に続

けて、ラテン語の^{ディヴィナ} Divina（神の）と同音同義のように呼ぶことを好む音楽ファンが多いのと同様の感じを受ける。

2、オストラヴァそしてチェコの花が世界へ

国際プラハ・ラジオのフランス語放送では、番組冒頭にパトリツィアが12歳だった2010年に、チェコおよびスロヴァキア両国のテレビ会社合同開催によるコンクールであるタレントマニアで優勝した折に歌った曲で開始されたことを前の項で述べた。

その番組をインターネット上でストリーミングにより流すだけでなく、ニュース部分を文字で要点を伝えると共に、番組で放送できなかった曲目をカバーするユーチューブ等をウェブサイトで紹介している。それはフランス語放送だけでなく、他の言語による放送も同様であるものの、紹介された曲目と曲順はいずれの放送も差異があり、自由に選ばれている。

フランス語版の⁽¹¹⁾紹介サイトでは、先ず、放送時には冒頭のさわりの部分だけに留められた「Time to Say Goodbye」⁽¹²⁾を、ユーチューブで全曲視聴出来るようリンクを張っている。

次いで、パトリツィアが機械仕掛けの人形オランピアに扮して歌った「生垣には、小鳥たち⁽¹³⁾」が紹介されている。ジャック・オッフエンバックの^{Opera fantastique}幻想的オペラである「ホフマン物語」の第2幕で、機械仕掛けの粋を尽くした精華である人形オランピアにより歌われる曲である。

この「生垣には、小鳥たち」は、パトリツィア自身が2016年5月15日にユーチューブ上にアップしている。以来7年余り経過した2023年12月7日11:00JST（日本標準時）現在で視聴回数20,002,730回と、2千万回を超えており、クラシック音楽では異例とも言えるヒット数を伸ばしている。上演されたのは、2016年1月7日のオストラヴァ新春コンサートで、ヤナーチェク・フィルハーモニー管弦楽団が共演している。指揮はマティアス・フェルスターであるが、当時パトリツィアは未だ17歳であり、コントラバスを支える父君はさぞ嬉しかったであろうと思うと微笑ましい。機械仕掛けの人形を生身の人間が演じるアンビバレントな魅力を見事に出している。機械仕掛けの人形そのものを本当の娘（fille）のように錯覚させる可愛らしさ、コロラトゥーラやトリルの見事さは勿論としてスタッカートや歯切れの良さをはじめとした歌い上げる技術の正確さ、声の清澄度と暖かさの融合した素晴らしさ、と魅力に満ち溢れた逸品となっているところが世界の人々を魅了しているであろう。同時に、そのコメント欄に世界各地から寄せられた1万4千を超えるメッセージから溢れ出る、パトリツィアの早世を悼み、悲しむ声の多さに圧倒される。

（この「生垣には、小鳥たち」へのアクセス先は <https://youtu.be/mVUpKIFHqZk>）

第3曲目には、アントニン・ドヴォルザークが作曲した「ルサルカ」⁽¹⁴⁾から、水の精ルサルカが歌う「月に寄せる歌」が掲げられている。人間の王子様との恋に落ちてしまった水の精のルサルカ。はかなくも、危うい恋が成就したかに見えながらも、ルサルカ自身が人間の姿にいる限りは口もきけず、話すことも出来ない水の精の切ない悲しみを、月に訴える歌である。

そして最後の4曲目にシャルル・グノーがヨハン・セバスティアン・バッハの前奏曲に聖句「アヴェ・マリア」⁽¹⁵⁾を重ねた曲が紹介されている。

スペイン語版では、フランス語版の4曲に「私のお父さん」1曲を加えた計5曲とし、その「私のお父さん」を2番目に紹介している。

ジャコモ・プッチーニ作曲のオペラ「ジャンニ・スキッキ」の中で、娘のラウレッタが父スキッキに「私のお父さん (O Mio Babbino Caro)」と呼びかけながら、彼女の願いである、愛する彼と一緒にいる為の指輪を買い行きたいとの思いを歌い上げるアリエッタ (短いアリア) である。

ドイツ語版は、⁽¹⁷⁾パトリツィアが機械仕掛けの人形オランピアに扮して歌う「生垣には、小鳥たち」の一曲のみに絞っている。

ロシア語版では、⁽¹⁸⁾バッハ＝グノーのアヴェ・マリアに加え、「私のお父さん」、と「生垣には、小鳥たち」の3曲が紹介されている。

一方、英語版では、⁽¹⁹⁾「Time to Say Goodbye」、ルサルカからの「月に寄せる歌」、「私のお父さん」、「生垣には、小鳥たち」の順序で4曲が選ばれている。

このように国際プラハ・ラジオがウェブサイトで紹介しているユーチューブでのパトリツィアの活躍を見てみると、25年の生涯を殆どオストラヴァで過ごした彼女がオストラヴァから、チェコ全国に、更には地球全体、くまなく世界の各地から視聴者層の熱烈な支持と情熱的関心を集めていることが判って来る。オフエンバックのホフマン物語「生垣には、小鳥たち」への2千万回を越える視聴者が受けたであろう感激、印象、哀悼を多様多彩な言語によるコメントの数々から読み解いて行くと、彼女の歌声の素晴らしさとその力の大きさと共に、ユーチューブのグローバル性も同時に理解できる。

だが、他方で、25歳で散った彼女、オストラヴァそしてチェコの花としてのパトリツィアが残してくれた録音・録画に残された歌声そのものは素晴らしいものの、音質と画質には問題があり、記録そのものも断片的なものが多く、その水準が彼女の真価を伝えるのにふさわしいものなのかどうか淋しく思える部分があることは否めない。

3、小荘厳ミサ曲の小天使として

ブルノのチェコ・フィルハーモニー合唱団はそのホームページで、⁽²⁰⁾合唱団の推奨演奏録画を掲げている。その筆頭に、ジョアキーノ・ロッシーニの「小荘厳ミサ曲」⁽²¹⁾ (La petite messe solennelle) が挙げられている。これは、同合唱団による2020年～2021年シーズンの第4回定期演奏会の模様を録画した1時間27分に及ぶものだが、この演奏会でソプラノのソロを担当したのがパトリツィア・ヤネチコヴァで、彼女の素晴らしい歌声を思い起こす為の貴重な記録となっている。

ジョアキーノ・ロッシーニ⁽²²⁾は1869年、76歳の時にパリのパッシーで没している。その数年前の1863年から1864年にかけて、アレクシス・ピレ＝ウィル（Alexis Pilet-Will）伯爵の求めに応じてロッシーニが作曲したのが「小荘厳ミサ曲」で、当時71歳、引退表明してから既に34年を経た頃の作品である。

小荘厳ミサ曲は演奏時間に1時間半近くを要する大曲の部類に入るが、「小（petite）」との形容詞が冠されているのは、オーケストラのような大編成ではなく、ピアノ2台とハーモニウム（リード・オルガン）1台によるコンパクトな小編成での伴奏を想定していたからである。この作品は、発注者のアレクシス・ピレ＝ウィル伯爵の館での私的な集まりで、法王庁大使も出席の下、1864年3月14日に初演⁽²³⁾されている。

その小編成の伴奏により、逆にソプラノ、アルト、テノール、バスと合唱団による歌唱パート⁽²⁴⁾の素晴らしさ、繊細さが際立つ場合もある。

もっとも、ソプラノのソロによる部分である Crucifixus（クルシフィクス）および O Salutaris Hostia（オ・サルタリス・オステティア／ホステティア）の内、後者の O Salutaris Hostia は当初の的小编成による曲には入っていなかったと言われる。ロッシーニが後にオーケストラ編成の曲を用意した際に、トマス・アキナスによる O Salutaris Hostia の冒頭4行分に曲を付け、小荘厳ミサ曲に加えている。以後、ピアノ2台とハーモニウムをバックとする的小编成の場合も O Salutaris Hostia を含む形で演奏され、歌われるのが慣例となったとされる。

この慣例の御陰で、ブルノのチェコ・フィルハーモニー合唱団による的小编成の演奏でも、パトリツィア・ヤネチコヴァによるソロ独唱での O Salutaris Hostia を、Crucifixus に加える形で視聴することが出来たのだとも言えよう。

ここでは、まさに的小编成のメリットである繊細さが生かされ、特にパトリツィア・ヤネチコヴァのソプラノが際立っている。

（小荘厳ミサ曲のアクセス先は、<https://youtu.be/CqzrmdevQSI> である。ここで取上げたパトリツィア・ヤネチコヴァ独唱の Crucifixus は、冒頭から45分29秒～48分50秒、O Salutaris Hostia は1時間12分48秒～1時間17分54秒の部分で視聴出来る。）

Crucifixus は、andante sostenuto（アンダンテ・ソステヌート）で、音を丁重に扱いながら歩く速さで演奏される変イ長調の部分であるが、ピアノ伴奏の静かな下支えを受けながら、パトリツィアの伸びのある声が天上に届くかのように響いている。十字架上でキリストが受ける苦難と試練の場が天上の世界に通じていることを確信させるようである。

パトリツィアがこのパートを練習している模様の録画はチェコ語版とスロヴァキア語版双方のウィキペディアに掲載されており、後に英語版⁽²⁵⁾にも追加されている⁽²⁶⁾。そこでの彼女は歌唱とメロディーの美しさそのものを楽しんでおり、十字架上のキリストの受難が大きく開かれた天上の門へ繋がっていることを信じながら歌っているようだ。新約聖書の使徒言行録2-36にある、「あなたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです⁽²⁸⁾」とのペトロの説教を体現するかの雰囲気が感じられる。

文豪スタンダールは、彼の『ロッシーニ伝』の序文で、ロッシーニのことを「才気があり、何も

かも笑いとばす男⁽²⁹⁾」と描いており、案外、パトリツィアが練習している時のような明るい歌声がロッシーニの本意に近いのかも知れない。

とは言っても、やはり演奏会本番で、パトリツィアが聴かせている清澄な響きの方が、魅力的に思われる。

O Salutaris Hostia は、「天の門を私たちの為を開いて、励まして下さる聖体に感謝します。追ってくる敵と闘う力をお与え、お救い下さい⁽³⁰⁾」と祈るトマス・アクィナスが綴った冒頭の4行部分に、ロッシーニは、andante mosso（アンダンテ・モッソ / 躍動して早めに歩くような速さ）でト長調の曲を付けている。

小荘厳ミサ曲の歌い手は、小天使に他ならないとロッシーニは言い、また使徒になぞらえたりもしている。この小荘厳ミサ曲で、属音上の七の和音等を縦横無尽に使い^{こな}熟して歌い上げ、アルペジオで高音部に向かうパトリツィアの声は、まさに小天使になりきっている。

もっとも、小荘厳ミサ曲を歌うパトリツィアを、真珠に例えるコメントもあり、^{うけ}頷かれもするが。

3行目の「Bella premunt hostilia（追ってくる敵と）」との、少々好戦的にも受け止められるトマス・アクィナスの表現は、この曲を嘗て聴いた際には余り良い印象は持たなかった。しかし、パトリツィアが、この演奏会の1年後から闘うことを強いられた敵がコロナ禍であり、更に引き続いての病魔であったことを思えば、「Bella premunt hostilia（追ってくる敵と）」と朗唱する合間に置かれた無音の部分の重さが胸に迫ってくる。頑張れと応援したくなる場面である。敵と戦うための援軍と救いが差し伸べられ、快癒に向かう術はなかったのかと疑念も湧いて来る。

パトリツィアは両親がスロヴァキア人の為に、スロヴァキア人として紹介されることも多い。また、パトリツィア自身も、自己紹介時にはスロヴァキア人と称することを好み、選択している。そのスロヴァキア出身のソプラノ歌手としては、1939年生まれのルチア・ポップが⁽³¹⁾個人的な印象に残っている。

1968年4月14日の日曜日、ウィーン国立歌劇場でモーツァルトのオペラ「魔笛」が上演されたが、その時、「夜の女王」役を務めたのがルチア・ポップだった。当時、彼女は未だ29歳で、パミーナの母親役は一寸可哀想とも思った記憶がある。しかし、そのコロラトゥーラは素晴らしかった。

ただ、その前日、1968年4月13日の土曜日、レナード・バーンスタイン指揮によるプルミエール初日公演「ばらの騎士」は割れんばかりの拍手が鳴り止まず、観客の熱狂振りが凄かった。その余韻が冷めやらぬ中の翌日の公演で、ルチア・ポップがパミーナの母親役を務めるよりも、前日の公演にあったヴェルデンベルク侯爵夫人の役で⁽³²⁾彼女の声を聴いてみたかったと、贅沢にもあらぬ配役をイメージしたりした。

そんなルチア・ポップが、脳腫瘍の為に54歳で亡くなった時も早世と感じたが、25歳で逝去してしまったパトリツィアの若さは、余りにも苛酷なものに思われ、惜しまれる。

2013年、15歳になったばかりの頃のパトリツィアは「誰を理想像としているか？」とのインタ

ビューに答えて、「音楽上のモデルと考えている人はいないけれど、オペラ界のスターだったルチア・ポップが大好きです。私たちの間に、もういらっしゃらないのが残念⁽³³⁾」、と語っていた。

「何故、大好きなのか？」との更なる突っ込みに対しては、「ルチア・ポップのグローバル（全体を包み込むようなとのニュアンス）な表現は、多くの面で美しい。彼女の歌は、軽くて、簡潔であると同時に、敏感で、優しく、やすらぎと幸せの感興を運んで来てくれます⁽³⁴⁾」と、しっかり答えていた。

それから、10年目、まばゆいばかりの天才的な閃光をきらめかせながら25歳で亡くなったパトリツィアが、15歳の時点で、既に先輩のルチア・ポップの業績から、謙虚に、また懸命に学びとる努力を払っていたことが推察できる回答だった。

また、時系列的には時を遡ることになるが、2011年11月、13歳のパトリツィアが父君と共に雑誌のインタビューを受けた際、「将来の夢として、是非、歌いたい一曲は？」との質問に、「魔笛の中で夜の女王が歌うアリアだ」と答えている。ただ、「うんざりする程、練習して、アリア中の最高音F3もこなせるようになったけれども⁽³⁵⁾」との話だった。「音楽で怖じけることはありますか？」との質問に対して、パトリツィアは「Ne (Non ; いいえ)」と即座に否定したのに加え、父君は「恐れるのも、敬い過ぎるのも駄目で、何事も挑戦と受けて立つのが大切⁽³⁶⁾」と補足していた。

4、モラヴィアの空を見上げて

パトリツィア・ヤネチコヴァの素晴らしい歌声を、ブルノのチェコ・フィルハーモニー合唱団演奏会での小荘巖ミサ曲で視聴出来ることを、先の項で紹介した。

ブルノはチェコ第2の都市であり、モラヴィア地方の中心地であるが、音楽の都ヴィーンまで高速道路 E461と A5で南下すると130km 程の至近距離であり、オーストリアの香りが漂う街でもある。逆に、オーストリア側から見れば、ドイツ語ではブリュン（Brünn ; 泉、源泉）と呼ばれるブルノの都市名どおり、泉湧く憩いの地なのだ。

そのブルノを出て東南東に向かうと23km 程でスラフコフ・ウ・ブルナ（Slavkov u Brna）、ドイツ語でアウステルリッツ（Austerlitz）に着く。

ブルノから東南の方角、数 km 足らずの一带は、1805年12月、ナポレオン・ボナパルトが7万3200人の兵力を擁するフランス軍の本陣を構えた場所である。その先、東方向は、アレクサンドル1世とクトゥーゾフ総司令官が指揮する8万7千人のロシア軍に加え、腰は引けていたもののフランツ1世の擁するオーストリア軍が加わり、塙露連合軍は優勢を確保、兵力的には劣勢のフランス軍と対峙した場所になる。

1805年12月2日朝からの「アウステルリッツの戦い」の描写は、ロシアの大文豪トルストイの『戦争と平和』を一読、再読 + a 回、読み直すことを薦めておきたい。史実に近いか否かの問題は

さておき、正に血湧き肉躍る描写から味わえるダイナミックな小説の面白さは、『戦争と平和』を読んでこそ味わえるものだと言える。サマセット・モーム (Somerset Maugham)、ジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy)、ロマン・ロラン (Romain Rolland)、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) を始めとした小説家が、世界第1級の作品と評価していることが腑に落ちる。

戦いに敗れ、重傷を負ったアンドレイ・ボルコンスキー公が、出血多量で意識朦朧となっていく中、それでも軍旗を手に、仰向け⁽³⁷⁾になったまま、プラツェン^{P r a t z e n}高地から見上げる空は、あくまでも高く、清らかで、寛やかだった。そんな空を眺めていると、勝利で慢心し虚栄心にまみれたナポレオンが、とてもちっぽけに見えた。そのように描かれた紺碧の空は、プラツェン高地やアウステルリッツを包摂するモラヴィアに拡がる無窮の空である。

トルストイが描くモラヴィアに拡がる空に触れたからには、フランスの文豪スタンダールの描いた『パルムの僧院』の話は避けては通れない。

「アウステルリッツの戦い」から下って、ほぼ9年半後のことになる。『パルムの僧院』に描かれる、侯爵家のうら若き青年ファブリスは、崇拝するナポレオンがエルバ島を脱出したことを知り、1815年6月18日のワーテルローの戦いに向け、フランス軍に組みするべく馳せ着けようと試みる。未だファブリスが16歳半ばかり17歳にかけての頃であった。しかし、フランス軍は敗れ、故郷イタリアの景勝地コモ湖周辺は敵方オーストリアの保護下に入ってしまった。そこで、ナポレオンの共鳴者と見做され逮捕投獄されることを恐れての、ファブリスの逃避行と恋の遍歴が始まるのである。ファブリスの老恩師が語る、「(恩師は司祭に昇任されなくて、かえって良かった) もし司祭になっていたら、モラヴィアの丘の牢獄、シュピールベルクに行く運命だったのだ⁽³⁸⁾」との回想は、ファブリス自身にとっては身近に迫った恐怖であった。「(ファブリスが官憲に) 見つかったらコモ湖畔からシュピールベルク⁽³⁹⁾一筋道」を辿らざるを得ない窮地に立たされていた。

このように、スタンダールは『パルムの僧院』の中で、モラヴィアのシュピールベルク城塞を牢獄として描いている。それから125年程後の第2次世界大戦中、シュピールベルク城塞は、ナチスドイツの秘密国家警察ゲシュタポ (Geheime Staatspolizei) により利用された時期もあった。

しかし、シュピールベルク (ドイツ語で Spielberg、チェコ語では Špilberk) とは、ドイツ語の意味では「遊ぶ (Spiel) 山 (berg)」であり、楽しく遊ぶ野山なのだ。事実、シュピールベルクはブルノの市街を眼下に望み、周囲に拡がるモラヴィアを一望に眺められる景勝の地である。

シュピールベルクを軍事拠点として利用することは1959年に廃止、ブルノ市立博物館として改装され、本来の「遊ぶ (Spiel) 山 (berg)」との意味に近い場所に戻りつつある。

更に、2000年からは、夏になると、シュピールベルク城塞の庭園でシュピールベルク音楽祭 (Festival Špilberk)⁽⁴⁰⁾ が開催されるようになった。

2019年8月14日から22日にかけて開催された第20回シュピールベルク音楽祭では、その初日にパ

トリツィア・ヤネチコヴァがブルノ・フィルハーモニー管弦楽団と共演している。

エクトル・ベルリオーズの「夏の夜 (Les Nuits d'été)」から「田園詩 (Villanelle; 牧歌)」、フランツ・レハールの「ジュディッタ (Giuditta)」から「私の唇は… (Meine Lippen Sie Kussen so Heiss)⁽⁴¹⁾」、オッフェンバックの「ホフマン物語」から「生垣には、小鳥たち (Les oiseaux dans la charmillé)」等、パトリツィアの十八番がプログラムに選ばれており、特にレハールの曲では、彼女の声の潜在性の高さが示されていたとの評価であった。⁽⁴²⁾また、この日と同様のメンバーとプログラムで、8月24日、ドイツ・ベルリンのブリッサー庭園で野外コンサートが開催されており、楽団の人達に夏休みの無い様子も伝えられている。⁽⁴³⁾

2019年から2020年初頭にかけては、オストラヴァ、ブルノ、スロヴァキア、ポーランド、ドイツと、パトリツィアの超過密スケジュールが続いていた。本拠地であるオストラヴァの管弦楽団に加え、プラハのスメタナ・ホールでは西ボヘミア交響楽団と、ポーランドではポズナン・フィルハーモニー管弦楽団等と共演し、素晴らしい躍進を示していた。

しかし、パトリツィアの飛翔する空が大きく広がったかに思われた元気溢れる時期、2020年初頭から、世界中がコロナ禍に席捲されてしまった。そのコロナ禍に前向きに挑戦しようと葛藤するパトリツィアの様子が、自宅の携帯ピアノで弾き語り、歌う姿から覗かれるのが痛ましい。⁽⁴⁴⁾

5、ビロードの歌声はアクセス禁止の国境を越えて

ロシアはロシア国内の消費者権利を保護する為として、国際プラハ・ラジオのロシア語放送ウェブサイトへのアクセスを2021年7月15日以降、全面的に禁止する措置をとった。⁽⁴⁵⁾と報じられている。⁽⁴⁶⁾

禁止の理由は、その20年前の2001年に国際プラハ・ラジオが取上げた、ヤン・パラフ (Jan Palach) に関する報道内容が、自殺を肯定的に語ることを禁止するロシア国内法に抵触するとの理由によると推測されている。⁽⁴⁷⁾

2021年のアクセス全面禁止措置の起因となった、対象報道は20年前の2001年のものだが、その報道の内容そのものは更に半世紀以上前の1968から1969年にかけての時期に遡るものである。

当時、ヤン・パラフはチェコスロヴァキア・カレル大学の学生で20歳だったが、プラハの中央にあるヴァーツラフ広場にあるヴァーツラフ像の下で、1969年1月19日に焼身自殺した青年である。その前年、1968年の新春から晩春にかけて、チェコスロヴァキアには、報道、表現、流通の自由がもたらされるかと期待された「プラハの春」と呼ばれる季節があった。しかし、ソ連主導のワルシャワ条約機構軍による侵攻を受けて、期待された夢が敢え無く潰えてしまった。その後のチェコスロヴァキアでは、自由が抑圧されているにも拘わらず、あきらめムードが蔓延、チェコスロヴァキアの人々だけでなく、世界の反応も消極的になってしまっていた。ヤン・パラフはそんな状況に抗議して、焼身自殺を決行したのだった。

ヤン・パラフの歿後20年を過ぎた1989年2月、ヤン・パラフのメモリアルに花束を捧げようとし

た劇作家のヴァーツラフ・ハヴェルが逮捕され、9カ月間の禁固刑に処せられた。これが、チェコスロヴァキアでの革命の切っ掛けの一つとなり、共産党による一党独裁が終焉する糸口となった。この革命が、比較的平和裡に推移し、ビロードの表面が白鳥の羽毛のように柔らかく優しい感触であるように、共産主義から脱却する革命がスムーズに成就したことから「ビロード革命」、あるいは平穩に革命が実現したことから「穏やかな革命」とも呼ばれるようになったのである。そこで、ヴァーツラフ・ハヴェルはチェコスロヴァキア大統領に就任した。

なお、チェコスロヴァキアで41年間続いた一党独裁に終止符を打った、1989年11月17日から28日にかけての革命を、チェコ語では Sametová revoluce (ビロード革命 / The Velvet Revolution / La révolution de Velours) と呼んでいるが、スロヴァキア語では Nežná revolúcia (穏やかな革命 / The Gentle Revolution / La révolution douce) と呼ばれている。

更に、続いて、1992年末にはチェコとスロヴァキアの二国に別れる分離独立により、1993年1月1日、チェコ共和国とスロヴァキア共和国が誕生した。この時、ハヴェルがチェコ共和国初代大統領となり、ミハル・コヴァチがスロヴァキア共和国大統領に選出されている。

この一連の分離独立について、英語やフランス語ではビロード (velvet; ヴェルヴェット / velours; ヴルール) との比喩を援用してビロード離婚^{divorce}との表現を用いる向きもある。しかし、現地ではチェコおよびスロヴァキアの両国とも、単にチェコスロヴァキア解散あるいは分離と呼んでいる。両国とも、分離独立に伴う痛みを味わっており、そのメリット / デメリットについての評価は今も賛否相半ばと言われており、ましてや離婚に喩えられるのは好まれていないようだ。2004年に両国がヨーロッパ連合に加盟し、分離の痛みは軽減したとも言われているが。⁽⁴⁸⁾

様々な紆余曲折があったにせよ、ユーゴスラビアのような悲劇が分離独立に伴って多々見られる中で、チェコとスロヴァキアの温かな関係は高く評価されるべきである。それこそ、ビロード (ヴェルヴェット) のように柔らかくふんわりとした静穏な分離が実現し、その後もヴェルヴェットのような関係を保っており、そんなゆったりした穏やかな関係を世界中が範としてくれたらと願わざるを得ない。

ただ、そのような穏やかな革命や国家関係の礎に、もう半世紀も前の話になるが、当時、未だ20歳だったヤン・パラフの焼身自殺による抗議、犠牲があったことは事実である。

その半世紀前の、しかし忘れられてはならないと思われる事実が、20年前の2001年に於ける国際プラハ・ラジオの報道内容に含まれた。それが、自殺を肯定的に語ることを禁止するロシア国内法に抵触するとされ、2021年7月15日以降、国際プラハ・ラジオのロシア語放送ウェブサイトへのアクセスを全面的に禁止するとの措置に繋がったのであろう。

しかし、「オペラ歌手の星が消えた」^{スター}と報じた国際プラハ・ラジオのロシア語放送の例に見るように、国際プラハ・ラジオ側の報道姿勢は健在である。

また、パトリツィア・ヤネチコヴァが残したウェブ上の歌声は、ロシアでも根強く愛されているようである。ロシア語によるファンのコメント投稿も多く、またそこで表明されている彼女の死を悼む思いには深いものがある。⁽⁵⁰⁾

シャンソン歌手のシルヴィ・ヴァルタン^{S y l v i e V a r t a n}が、故国ブルガリアのマリツァ川を偲ぶと同時に、自由を求めパリへの亡命を家族帯同で先導してくれた父君への感謝を込めて歌った曲に「La Maritza^{ラ マリ ザ ャ} (思い出のマリツァ; ジャン・ルナール^{J e a n R e n a r d}作曲)」がある。この曲に、チェコの作詞家パヴェル・ザック^{P a v e l Z á k}の歌詞を付けた「Co mi dáš⁽⁵¹⁾ (何を私に下さるの)」を、パトリツィアが歌っている。彼女の歌声に寄せられた、ロシア語でのコメントや、パトリツィアへの愛惜哀悼からは、中欧から東欧にかけて通底する文化的な香りが感じられる。

もっとも、ロシア語で書き込みされているからとか、ロシアに割り当てられている国別コード=トップ・レベル・ドメイン名(ccTLD)が使われているにせよ、必ずしもロシア国内からの発受信とは断定出来ないが。しかし、ロシア語を話し書く人々のパトリツィア・ヤネチコヴァを愛する層は広く厚いのである。

スロヴァキア人の両親の下にドイツで生まれ、スロヴァキア人の恋人と結婚したパトリツィア・ヤネチコヴァが、チェコのオストラヴァで活躍、チェコ放送傘下の国際プラハ・ラジオの追悼音楽番組で哀悼の意が世界に伝えられるという、まさにピロードのような環境に包まれた、パトリツィア・ヤネチコヴァの歌声が国境の壁を超克していることが実感される。

6、パトリツィアの闘病に花束を

コロナ禍からの黎明がようやく輝きだした2021年末から2022年にかけて、コンサート、オペラ、ミュージカルと予定も目白押しで、パトリツィア・ヤネチコヴァの素晴らしい活躍と一層の飛躍が期待されていた。

しかし、「2022年1月31日の月曜日、快晴の朝、太陽の光を反射して、氷結した木々や道路が煌めき壮麗だった。電話では検査結果を伝えられないので、直ぐ来るようにと医師から告げられ、病院に出掛けた。その帰り、救急車から出ると、既に空は雲に覆われていました⁽⁵²⁾」と、パトリツィア・ヤネチコヴァは、後に雑誌の対談で語っている。

2022年2月9日、インスタグラム⁽⁵³⁾およびフェイスブック⁽⁵⁴⁾で、更に、その2週間後にはユーチューブ⁽⁵⁵⁾を介して、1月末に乳癌との診断を受けた為、厳しい闘病生活に入らなければならないと公表した。舞台を離れ、コンサート等の予定もキャンセルしたことを伝えると同時に、チェコの芸術家支援基金を通じての援助を依頼した。そして、病魔との戦いに打ち勝って、歌う世界に何時か凱旋することを誓ったのだった。

インスタグラムおよびフェイスブックでの公表に衝撃を受けた人々から、お見舞いや激励の言葉が寄せられた。チェコ語やスロヴァキア語によるものは勿論だが、ドイツ語、ポーランド語、英語、日本語、韓国語、中国語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、ポルトガル語、フランス語、等々、世界各国語によるメッセージが投稿された。フェイスブックでの700を超えるコメントは、

長文も多く、懇切丁寧な治療方法や望ましい食事なども綴られている。

もっとも、「総てのメッセージが優しいものでは無く、それが人間の本質の一面なのでしょう」⁽⁵⁶⁾と、ミラン・バトール記者との4回目のインタビューで、厳しくも重い現実を述懐している。

しかし、そのような暗いニュースが流れた2ヶ月後には、一転して明るいメッセージが届けられた。化学療法結果は良好で、担当の腫瘍医と相談した結果、慎重を要するもののミュージカルに出演することは可能とのことであった。⁽⁵⁷⁾オストラヴァのモラヴィア・スレスコ（シレジア）国立劇場でのミュージカル「Harpagon je lakomec?」（アルパゴンは強欲か?；モリエール「守銭奴」のオリジナル・ミュージカル版）⁽⁵⁸⁾で4月6日舞台に復帰し、4月12日には「ウエスト・サイド物語」のマリア役⁽⁵⁹⁾で出演している。

その後も、癌の治療は順調で、8月10日からの外科手術は厳しいものの成功しているとの経過が果敢にアップされ、回復基調にあることが報告されていた。

2022年12月15日には、ベドルジハ・スメタナのオペラ・ブッフア「売られた花嫁（Prodaná nevěsta / La Fiancée vendue）」のエスメラルダ役で舞台に出ている。しかし、12月22日のインタビューでは、「本来の力を出せない」⁽⁶⁰⁾との苦悩も漏らしている。

闘病を続ける彼女を支援し、激励する為のコンサートが2023年1月7日、オストラヴァ福音教会で開催⁽⁶¹⁾されている。半年後の6月18日には25歳の誕生日を迎え、更に彼女が「人生で最も美しかった日」⁽⁶²⁾と書き込んだ6月24日には結婚と、朗報が続いた。

しかし、夏には肝機能の不全が重症化⁽⁶³⁾し、薬石投与を含む利用可能な治療が望めなくなり、パトリツィア・ヤネチコヴァを救うことが出来なかったと報じられた。⁽⁶⁴⁾2023年10月1日夕刻のことである。その前々日、9月29日に結婚式の模様⁽⁶⁵⁾をユーチューブにアップし、30万回を超える視聴と、1千通を超えるコメント欄での祝辞が寄せられる最中であった。

病魔という敵に^{ふる}勇気を奮って挑戦し、頑張^るって、立派に闘ったパトリツィア・ヤネチコヴァに花束を贈りたい。

7、天使の翼とメディアの光

「天使のような才媛は、その翼を完全に拡げるには時間が足りなかった。⁽⁶⁶⁾しかし、彼女は最善を尽くした。」

オストラヴァの日刊文化サイトである「オストラヴァン」でミラン・バトール記者は、パトリツィア・ヤネチコヴァが逝去した翌日の記事に、そのような見出しを付けた。

しかし、パトリツィア・ヤネチコヴァを8歳の頃から指導し、更にはヤナーチェク音楽院、オストラヴァ大学を通じて、公私双方で彼女に寄り添って来て、彼女の心に極めて近い存在であるエ

ヴァ・ドリズゴヴァ教授からは、「パトリツィアは子供のころから翼を拡げ、人生で他の人より多くのことを成し遂げました。それで、今は天にいるのです⁽⁶⁷⁾」とのメッセージがあったことを同時に紹介している。

更に、パトリツィア・ヤネチコヴァは、余りにも拙速にこの世から離れてしまったものの、信じられない程の努力家で、強い責任感に裏付けされた、多岐に亘る能力を見せながら、輝ける、消されることのない極印を残したのだと記した。⁽⁶⁸⁾

生徒としてのパトリツィア・ヤネチコヴァと、彼女を指導し「パトリツィアは子供のころから翼を拡げ…」とのメッセージを寄せたエヴァ・ドリズゴヴァ教授との、息の合った^{デュオ}二重唱を視聴してみると、⁽⁶⁹⁾良い関係の雰囲気^{デュオ}に二人が包まれている様相が実感される。

そんな二重唱の例として、先ず、「そよ風によせて (Sull'aria...che soave zeffiretto)」にアクセスしてみよう (アクセス先: <https://youtu.be/d4s5VHlAwDw>)。

モーツァルトのオペラ「フィガロの結婚 (Le Nozze di Figaro)」の第3幕で、放蕩の過ぎる伯爵を懲らしめる為に、結婚を間近に控えたスザンナと伯爵夫人が二人で手紙をドラフトする場面で歌われる「手紙の二重唱」とも呼ばれる^{canzonetta}小曲である。

伯爵夫人ロジーナ役を先生のエヴァ・ドリズゴヴァが、スザンナ役を生徒パトリツィア・ヤネチコヴァが務めているが、如何にも二人が共同作戦を練っている様子が上手く演出されている。

なお、この二重唱のバックで共演しているのはオロモウツのモラヴィア・フィルハーモニー管弦楽団であるが、指揮者は先に3項で紹介した小荘厳ミサ曲の指揮を執った^とパオロ・ガット (Paolo Gatto) で、エヴァ・ドリズゴヴァ先生の伴侶である。⁽⁷⁰⁾

2013年8月17日、モラヴィアのヤルメリツ城での音楽祭最終日の模様が録画されたもので、パトリツィアが15歳になったばかりの頃となる。演奏後、パオロ・ガットに^{うなが}促され、聴衆の拍手に応える二重唱の2人の笑顔が素晴らしい。

二重唱の二番目の例として、23歳になったパトリツィア・ヤネチコヴァがエヴァ・ドリズゴヴァ先生と出演したりサイタルでの模様にアクセスしてみたい。(アクセス先: https://youtu.be/kgXyWa_SDo)

この録画は、⁽⁷²⁾コロナ禍で苦闘する教育関係者支援の為に、チェコ・テレビの支援の下、オルロヴァのシレジア福音教会に於いて、2021年4月24日に非公開で行われた。出演者は二重唱の2人にピアニストとアナウンサーの計4人に留められている。録画の長さは1時間9分54秒であるが、例としての曲は、録画の最後の部分となる1時間3分42秒以降の小曲を視聴してみよう。

レオ・ドリーブ (Léo Delibes) 作曲のオペラ「ラクメ (Lakmé)」第1幕からの一曲で、⁽⁷³⁾1883年4月14日にパリのオペラ・コミック座で初演されたものである。イギリス統治下のインドで、バラモン教僧侶の娘ラクメが侍女マリカと共に、ジャスミンの花咲く寺院へ出掛け、青い蓮の花を一緒に摘みまじょうと歌う「花の二重唱 (duo des fleurs)」である。可憐な娘ラクメとイギリス軍将校ジェラルド、二人の未来を待ち受ける悲恋を予知させる曲となっている。

娘ラクメを演じるパトリツィア・ヤネチコヴァと、侍女マリカ役のエヴァ・ドリズゴヴァ先生との掛け合いが、静寂な中で穏やかな雰囲気醸し出している。

二人が、同時に、しかし異なる歌詞を掛け合わせる部分が絶妙な調和を保っており、フランス語での文意が鮮明に伝えられて来る。二人が違ったことを語っているのだけれど、しかし一緒。皆が違って、皆が良い、との二重唱版となっている。

一方、コロナ禍が続く中で、様々な制約があったことが再確認される記録ともなっている。2021年初春は未だ、コロナ感染予防の為、非公開を余儀なくされていた時期でもあり、静寂な環境の利点もあるものの、拍手や観客の反応が得られない寂しさがある。また、教会の中の暖房設備の制約からか、厚手の外套を着込んでの長時間演奏の厳しさも伝わって来る。パトリツィアたちが抱えていた苦難が偲ばれる。

前例の2013年に歌われた「手紙の二重唱（そよ風によせて）」では15歳だったパトリツィアが、後者の例の「花の二重唱（duo des fleurs）」を歌った2021年には23歳となり、その間の技倆の進展に著しいものが覗けると同時に、エヴァ・ドリズゴヴァ先生の良き指導も推察される。

パトリツィア・ヤネチコヴァとエヴァ・ドリズゴヴァ先生と一緒に歌う二重唱の例を追って見ると、良き伝統を次世代に継承しようとする微笑ましい関係が麗しい。

エヴァ・ドリズゴヴァ先生は、「パトリツィアの声を変えることや、歪めることが無いように、力を入れないで、漸進的に成長できるようなレパートリーを選ぶようにしている⁽⁷⁴⁾」と、2014年に語っていた。「力を入れない」、「無理をしない」との、先生の的確な判断やアドバイスを報われつつあり、喜びや期待には大きいものがあったのは確かであろう。

とは言え、ミラン・バトール記者の「信じられない程の努力家で、強い責任感に裏付けされた…」との記述からも推察されるパトリツィアの長所が、逆に2022年の術後スケジュールを厳しいものに留めてしまった可能性は否めない。公演予定をキャンセルしたとのメッセージどおりには運ばなかった事情が垣間見える。もっとも、2022年4月の「ウエスト・サイド物語」のマリア役での出演は、当の本人の希望に沿ったものでもあったようで、その際の写真が彼女の逝去を報じるニュース等で多く使われていた。

結果としてし、師よりも次世代を担う若者が早世してしまうような痛ましいケースもあり得るとの悲劇が実感させられてしまう。

同時に、若い世代から学ぶこともまた多く、パトリツィア・ヤネチコヴァが、翼と十分に拡げられたのかどうかはさておき、「パトリツィアは子供のころから翼を拡げ…」との先生の述懐も共感させられる思いがする。

パトリツィア・ヤネチコヴァとエヴァ・ドリズゴヴァ先生との世代の境界を越えたコミュニケーションが織りなす、ほのぼのとした空気感は、『戦争と平和』でアンドレイ公が見上げるモラヴィアの紺碧の空のように、あくまでも高く、清らかで、寛大な感じをもたらしてくれる。

1805年12月2日朝からの「アウステルリッツの戦い」を含め、第一次と第二次に及ぶ世界大戦を

挟み、更には20世紀末の冷戦終結時までを振り返って見ると、国境の壁、人種や国籍による境界、言語や信仰信条への干渉、等々で苦難の歴史を辿ったのが、バイエルン、ボヘミア、モラヴィア、シレジア、スロヴァキアにかけての地域である。

しかし、1998年6月18日にドイツのバイエルン州ミュンヘンでスロヴァキアの両親の間に生まれたパトリツィアが、チェコのオストラヴァで育ち、学び、歌いながら、2023年10月1日夕刻、天に召されるまで、嘗ての地域的な対立が影を落とした形跡は皆無である。

20世紀の終わりから21世紀の現在にかけて、バイエルン、ボヘミア、モラヴィア、シレジア、スロヴァキアにかけての地域に穏やかな、寛容度の高い、清澄な空気が流れていることが感じられる。

しかし、不寛容の風潮が地球を取り巻くように蔓延し、国家間の対立や悲惨な戦争が、音楽を始めとした芸術の分野にまでインパクトをもたらしている昨今の世界情勢⁽⁷⁵⁾である。パトリツィアが活躍し、翼を拡げつつあった地域の優しく、穏やかで、ふくよかさに包まれた寛容度の高い在り方を模範として考え直して見る必要があると思われる。

また、パトリツィアが早世したこともあり、DVDやテレビ放送等による高品質メディアの記録が殆どないことは残念である。しかし、逆に方式や地域性の制約を受けないメディアによる世界への拡がり、インスタグラム、フェイスブック、ユーチューブ等の双方向メディアで確保され、その光の恩恵を世界の人々が享受出来ることは幸せであると思われる。特に、パトリツィアの投稿した録画やメッセージを巡って飛び交う多様な言語からは、そのコミュニケーションを支援する自動翻訳機能の精度が高まり、言語の壁が克服されつつあることが実感される。

ただし、そのようにコミュニケーションが容易な時代であればこそ、パトリツィアを苦しめた、「総てのメッセージが優しいものではなく、それが人間の本質の一面なのでしょう」と述懐させたような、悪意ある虚偽メッセージに関しては、そのようなメッセージの流通交換を決して許さないシステムの構築が迫られている。

歌姫パトリツィアの成功への羽ばたきが止むことなく、翼が更に拡がり、迎え入れられた天での飛翔に支障が無いことを、そして彼女の歌声が世界中で更に愛され続けることを祈りたい。

なお、脚注に付したウェブ等の参照日時は、特に記載の無い限り、2023年10月1日から2024年1月22日23:00JSTにかけてのものである。

また、チェコ語、スロヴァキア語、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語から、フランス語、英語、ドイツ語への自動翻訳および照合にあたっては、主としてGoogle translateに依拠した。特に、注釈中に引用紹介したチェコ語サイトのフランス語文はGoogle translateの「チェコ語→フランス語自動翻訳」機能を利用、記録した結果である。

- (1) “Una triste noticia afectó el ámbito de música clásica checa. A los 25 años de edad falleció la diva Patricia Burda Janečková.”
 Fallece la diva Patricia Burda Janečková a los 25 años de edad 08/10/2023
<https://espanol.radio.cz/fallece-la-diva-patricia-burda-janeckova-a-los-25-anos-de-edad-8796249>
- (2) “« J’adorais chanter et peu m’importait de savoir si j’allais remporter le concours ou pas. J’étais encore une enfant. Après ma victoire, c’est devenu plus compliqué pour moi, je n’étais pas habituée aux caméras, aux interviews... J’étais timide et ne savais pas comment parler aux adultes », s’était souvenue Patricia Janečková dans un entretien.”
 Musique : hommage à la jeune soprano Patricia Burda Janečková 08/10/2023
<https://francais.radio.cz/musique-hommage-a-la-jeune-soprano-patricia-burda-janeckova-8796386>
- (3) 2010年12月10日09:00ET (Eastern Time) 放送のCNNは、12歳の、パトリツィア・ヤネチコヴァがチェコおよびスロヴァキアのタレントマニアで、最終投票120万票の内、53%を獲得して優勝したことを報じたと記録されている。
 “All right, now, an amazing performance in Slovakia. Take a look. Oh my goodness. Her voice is amazing and she is just 12. Patricia Janeckova is the winner of the Czech/Slovak Talents Mania television show. Some 1.2 million viewers took part in the final vote; 53 percent favored her and you can bet the music world is taking notice. My goodness.” CNN NEWSROOM Aired December 10, 2010 - 09:00 ET.
<http://edition.cnn.com/TRANSCRIPTS/1012/10/cnr.01.html>
- (4) “Ihre Karriere begann sehr früh, sie endete aber viel zu früh. Die Opernsängerin Patricia Burda Janečková ist am vergangenen Sonntag im Alter von nur 25 Jahren an Krebs gestorben”
 Tod mit 25 Jahren: Opern- und Musicalsängerin Patricia Burda Janečková 08.10.2023
<https://deutsch.radio.cz/tod-mit-25-jahren-opern-und-musicalsangerin-patricia-burda-janeckova-8796311>
- (5) “Погасла звезда оперной певицы Патриции Бурда Янечковой”
<https://ruski.radio.cz/pogasla-zvezda-opernoy-pevicy-patricii-burda-yanechkovoy-8796312>
- (6) “Rising opera star Patricia Burda Janečková succumbs to cancer at 25. Soprano Patricia Burda Janečková was one of the bright lights of the opera world. Her young life and promising career were tragically cut short by cancer to which she succumbed at the age of 25. She died on October 1, 2023.”
<https://english.radio.cz/rising-opera-star-patricia-burda-janeckova-succumbs-cancer-25-8796299>
- (7) In memory of Patricia Janečková 23. 10. 2023
cf. G. F. Handel - Acis and Galatea (HWV 49) <https://youtu.be/8zNxWvQXJpY>
 Baroque Theatre in Valtice - Festival Concentus Moraviae (2017)
<https://www.collegiummarianum.cz/en/in-memory-of-patricia-janeckova/>
- (8) “Le Festival de Lednice consacre le concert de vendredi à la mémoire de la chanteuse Janečková 10/03/2023”
<https://cesky.radio.cz/lednický-festival-venueje-patecni-koncert-pamatce-pevkyne-janeckove-8796113>
- (9) “La chanteuse Patricia Janečková est décédée à l’âge de 25 ans et la meilleure façon de se souvenir d’elle est à travers ses enregistrements.”

Zpívá Patricia Janečková (Patricia Janečková chante)

<https://d-dur.rozhlas.cz/zpiva-patricia-janeckova-9097361>

- (10) <https://www.klasikaplus.cz/cro-d-dur-dva-prenosy-z-kralovehradeckeho-hudebniho-fora-a-nahravky-patricie-janeckove/>
- (11) Musique : hommage à la jeune soprano Patricia Burda Janečková 08/10/2023
<https://francais.radio.cz/musique-hommage-a-la-jeune-soprano-patricia-burda-janeckova-8796386>
- (12) Patrícia Janečková First Audition,12, Amazing Pure Tone So Beautiful!! | “TIME TO SAY GOODBYE” <https://youtu.be/OfNul7LZCdc>
- (13) Patricia Janečková ; “Les oiseaux dans la charmille” (Jacques Offenbach ; Les contes d’Hoffmann)
 20,002,730回視聴 2016/05/15アップロード
 Jacques Offenbach : “Les oiseaux dans la charmille” (Les contes d’Hoffmann / The Tales of Hoffmann) Patricia Janečková, soprano - “New Years Concert in Vienna Style“ Janáček Philharmonic Ostrava, Chief conductor: Heiko Mathias Förster, January 7, 2016, Ostrava, Czech Republic.
<https://youtu.be/mVUpKIFHqZk>
- (14) Patricia Janečková ; Antonín Dvořák, Rusalka - “ Měsíčku na nebi hlubokém”
https://youtu.be/8WrXtnCX_9g
- (15) Patricia Janečková: J S Bach - Charles Gounod, Ave Maria.
<https://youtu.be/GiNyV6AK7kM>
- (16) Patricia Janečková: Giacomo Puccini, O Mio Babbino Caro, Gianni Schicchi
https://youtu.be/Q5L3W_uzygU
cf. <https://espanol.radio.cz/fallece-la-diva-patricia-burda-janeckova-a-los-25-anos-de-edad-8796249>
- (17) Tod mit 25 Jahren: Opern- und Musicalsängerin Patricia Burda Janečková
<https://deutsch.radio.cz/tod-mit-25-jahren-opern-und-musicalsangerin-patricia-burda-janeckova-8796311>
- (18) Погасла звезда оперной певицы Патриции Бурда Янечковой 08.10.2023
<https://ruski.radio.cz/pogasla-zvezda-opernoy-pevicy-patricii-burda-yanechkovoy-8796312>
- (19) Rising opera star Patricia Burda Janečková succumbs to cancer at 25 10/08/2023
<https://english.radio.cz/rising-opera-star-patricia-burda-janeckova-succumbs-cancer-25-8796299>
- (20) Czech Philharmonic Choir Brno
<https://www.youtube.com/@czechphilharmonicchoirbrno626>
- (21) Českého filharmonického sboru Brno ; Gioacchino Rossini: Petite messe solennelle, 指揮 ; パオロ・ガット (Paolo Gatto). <https://youtu.be/CqrzmddevQSI>
- (22) Thierry Beauvert et Peter Knaup, Rossini : Les Pêchés de gourmandise, Plume, Paris, 1997, 214 pp.
- (23) Mario Nicolao ; La Maschera di Rossini, RCS Rizzoli Libri S.p.A., Milano, 1990. (マリオ・ニコラーオ、小畑恒夫訳；ロッシーニ 仮面の男、音楽之友社、1992年、p.265)
- (24) このブルノのチェコ・フィルハーモニー合唱団の演奏会では、Patricia Janečková がソプラノ、Monika Jägerová, がアルト、Aleksander Kruczek がテノール、David Szendiuch がバスを担当している。指揮は Paolo Gatto (パオロ・ガット；最終項の7項で改めて紹介する)。合唱は勿論、ブルノのチェコ・フィルハーモニー合唱団である。

- (25) Patricia Janečková, G. Rossini, Petite Messe Solenelle, Crucifixus.
https://cs.wikipedia.org/wiki/Patricia_Jane%C4%8Dkov%C3%A1
https://cs.wikipedia.org/wiki/Soubor:Patricia_Jane%C4%8Dkov%C3%A1_-_G._Rossini_-_Petite_Messe_Solenelle_-_Crucifixus.webm
- (26) https://sk.wikipedia.org/wiki/Patricia_Jane%C4%8Dkov%C3%A1
https://sk.wikipedia.org/wiki/S%C3%BAbor:Patricia_Jane%C4%8Dkov%C3%A1_-_G._Rossini_-_Petite_Messe_Solenelle_-_Crucifixus.webm
- (27) https://en.wikipedia.org/wiki/Patricia_Jane%C4%8Dkov%C3%A1
- (28) 聖書 新共同訳；使徒言行録 2-36、日本聖書協会、1989、p.(新)216.
- (29) スタンダール、山辺雅彦訳；ロッシーニ伝、1992、みすず書房、p.4. (Stendhal ; Vie de Rossini suivie d'un Dilettante, Cercle du Bibliophile, Genève, 1968.)
cf. マリオ・ニコラーオ、小畑恒夫訳；ロッシーニ 仮面の男、音楽之友社、1992 (Mario Nicolao ; La maschera di Rossini, Rizzoli Libri, 1990, Milano, 240pp.)
- (30) トマス・アクィナスによるラテン語原文では、O salutaris Hostia / Quæ cœli pandis ostium / Bella premunt hostilia / Da robur, fer auxilium (Amen) と歌われ、フランス語では、Ô réconfortante Hostie / qui nous ouvres les portes du ciel / les armées ennemies nous poursuivent / donne-nous la force, porte-nous secours と訳されたりしている。これを、不肖は、「天の門を我らの為に開いて、励まして下さる聖体に感謝します。追ってくる敵と闘う力をお与え、お救い下さい」と意識してみた。
- (31) *cf.* Lucia Popp, Brigitte Fassbaender, Nicolai Gedda, Dimitri Kavakos, Choir of King's College-Cambridge, Stephen Cleobury (direction), EMI, 1992.
- (32) 尚、1968年4月13日の「ばらの騎士」でヴェルデンベルク侯爵の夫人 (Die Feldmarschallin / 元帥夫人) の役を演じたのは、クリスタ・ルトウヴィツヒ (Christa Ludwig) だった。
- (33) “Je n’ai pas de modèle musical particulier, mais j’aime beaucoup la star de l’opéra slovaque Lucia Popp, qui n’est malheureusement plus parmi nous”
<https://operaplus.cz/ucitel-a-zak-aneb-eva-drizgova-a-patricia-janeckova-v-jaromicich-nad-rokytnou/>
- (34) “Son expression musicale globale est d’une beauté à bien des égards. Son chant véhicule une sensation de bien-être et de bonheur, il est léger, simple et à la fois sensible et doux. C’est un baume pour l’âme.” *ibid.*
- (35) “Il y en avait un, mais j’en avais marre. C’était l’air de la Reine de la Nuit de La Flûte Enchantée, où la note la plus haute est F3. Et c’est vraiment assez élevé. J’ai même commencé à le chanter. Cela a fonctionné, mais c’est toujours difficile pour moi.”
 Alena Uhlířová ; Patricia Janečková + Martin Janeček, : Cizojazyčné texty se učím foneticky jako básničky, 27. 11. 2011.
<https://www.topzine.cz/patricia-janeckova-cizojazycne-texty-se-ucim-foneticky-jako-basnicky>
- (36) “(Son père Martin Janeček) Nous ne devrions pas créer de peurs ni de respect. Tout doit être pris comme un défi.” *ibid.*
- (37) Léon Tolstoï ; La Guerre et la Paix, Livre Premier, Chapitre XIX, No 66 de La Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1978, pp.369-373.

- (38) スタンダール、大岡昇平訳；パルムの僧院、新潮文庫、新潮社、1951、p.(上)246。
 “(Mais tout a été pour le mieux. ...) si j’eusse été curé à Brescia, ma destinée était d’être mis en prison sur une colline de la Moravie, au Spielberg.”
 Stendhal ; La Chartreuse de Parme, No 13 de La Bibl
- (39) iothèque de la Pléiade (Stendhal ; Romains II), Gallimard, 1977, p.173. 「d de lac de Côme au Spielberg.” *ibid.* p.176.
 cf. 伊藤英一；情報社会と忘却権—忘れることを忘れたネット上の記憶— in 『法学研究』第84巻第6号、慶應義塾大学法学研究会編、平成23年6月、pp.161-208.
- (40) <https://www.facebook.com/SpilberkFestival/>
- (41) 下掲の録画は、ブルノでの演奏ではないが、2016年1月7日オストラヴァ新春コンサートでの記録を参考までにメモしておきたい。
 cf. Patricia Janečková ; Meine Lippen” (Franz Lehár - Giuditta)
<https://youtu.be/pzF3ubtimGE>
- (42) “Dans l’air de Giuditta tiré de l’opérette du même nom de Franz Lehár, la soliste dont on se souvient a encore mieux démontré son potentiel vocal.”
<http://www.musicfriendlycity.cz/feature-articles/reviews/dance-and-romance-at-the-opening-of-the-spilberk-festival>
- (43) “Brno’s Music Scene Doesn’t Go on Holiday – Špilberk International Music Festival Coming in August”
<https://brnodaily.com/2019/07/04/culture/brnos-music-scene-doesnt-go-on-holiday-spilberk-international-music-festival-coming-in-augus/>
- (44) “2020/04/17 The time we are experiencing is unique and specific in many ways. That requires an original and unconventional approach for artists who want to keep in touch with their audience. That’s why I pulled out my picnic version of the grand piano and accompanied myself to Rossini’s song La Danza.”
 Patricia Janečková ; La Danza” (Rossini)
<https://youtu.be/Xy4bFpaGnII>
- (45) Clément Vérité; State-owned Czech Radio Blacklisted in Russia, Newsendip. July 20, 2021.
<https://www.newsendip.com/public-czech-radio-prague-international-blacklisted-in-russia-2021/>
- (46) “Russia blocks Radio Prague International’s website on its territory、 07/17/2021”
<https://english.radio.cz/russia-blocks-radio-prague-internationals-website-its-territory-8723337>
- (47) “The Russian agency says the article violates Russian laws by speaking about suicide in positive terms.”
<https://english.radio.cz/russian-service-radio-prague-international-blocked-russia-over-20-year-old-8723440>
- (48) Laura Andrieu ; Vingt-cinq ans après le « divorce de velours », Tchèques et Slovaques conservent des relations exemplaires, le 28/10/2018.
<https://www.lefigaro.fr/international/2018/10/28/01003-20181028ARTFIG00023-vingt-cinq-ans-apres->

le-divorce-de-velours-tcheques-et-slovaques-conservent-des-relations-exemplaires.php

- (49) “Погасла звезда оперной певицы Патриции Бурда Янечковой”
<https://ruski.radio.cz/pogasla-zvezda-opernoy-pevicy-patricii-burda-yanechkovoy-8796312>
- (50) “Царствие небесное рабе Божьей Патрисии. Как же тебя жаль, почему тебя не защитили не сберегли? Для меня ты останешься в памяти навечно самым милым ребёнком на свете, с родными глазами и улыбками.. Помилуй Господи и спаси твою душечку.”
<https://www.youtube.com/watch?v=u9UR8KZARfg>
- (51) Patricia Janečková ; Co mi dáš (La Maritza). <https://youtu.be/gaFLpYiS17M>
- (52) “C’était l’année dernière, le 31 janvier, un lundi. Et c’était magnifique. Le soleil brillait, les routes et les arbres étaient gelés, donc tout brillait au soleil. Le médecin m’a appelé pour me dire que je devais venir le plus tôt possible pour avoir les résultats, car elle ne pouvait pas me les communiquer au téléphone. (...) Je me souviens que lorsque je suis sorti de l’ambulance, il faisait déjà nuageux.”
 L’épreuve fatale du prodige. Mon monde s’est arrêté, dit Patricia Janečková (Osudová zkouška zázračného dítěte. Můj svět se zastavil, říká Patricia Janečková)
https://www.idnes.cz/zpravy/revue/spolecnost/patricia-janeckova-rakovina-nador-nemoc-zpevacka-talentmania.A230313_140527_lidicky_rod
- (53) <https://www.instagram.com/p/CZwhrrnsxR1/>
- (54) <https://www.facebook.com/patriciajaneckova>
- (55) Patricia Janečková - For all my fans. <https://youtu.be/9c55bCbCogI>
- (56) “Cependant, la vérité est que tous les messages n’étaient pas gentils. Cela fait probablement partie de la nature humaine.”
<https://www.ostravan.cz/81552/zemrela-patricia-janeckova-1998-2023-andelsky-talent-ktery-nestacil-plne-rozvinout-sva-kridla/>
- (57) <https://www.facebook.com/patriciajaneckova/posts/pfbid0368mhA5r5aZGiLiEAaAX9hSLfZYPBpaXAFB6UAoG9xeVKnQzaThkVPqLf8t59Npm2l>
- (58) <https://www.i-divadlo.cz/divadlo/narodni-divadlo-moravskoslezske/harpagon-je-lakomec>
<https://www.ndm.cz/cz/opereta-muzikal/inscenace/5806-harpagon-je-lakomec/>
- (59) <https://www.facebook.com/patriciajaneckova/posts/pfbid02XSZDXAPEJDavevoyKNupTzzweiBPrtENcKQd5zfH74ZrsAyy1ndbqSUAdWtd7vNSI>
- (60) Patricia Janečková už opět rozdává radost zpěvem. Je náročné nabrat původní sílu a kondici, říká 29.12.2022 ostravan.cz - Milan Bátor
- (61) <https://www.ostravan.cz/77212/patricia-janeckova-uz-opet-rozdava-radost-zpevem-je-narocne-nabrat-puvodni-silu-a-kondici-rika/>
- (62) “One month ago it was the most beautiful day of my life”, on 24th July. 2023.
<https://www.instagram.com/p/CvFJNOgMVT5/>
- (63) “après un traitement réussi contre l’apparition initiale du cancer, au cours de l’été 2023, la maladie est réapparue sous une forme beaucoup plus agressive, affectant cette fois le foie, et même tous les traitements disponibles n’ont plus aidé” *ibid.*

- (64) “La maladie est revenue avec beaucoup plus d’intensité pendant les vacances d’été et a attaqué son foie. Tous les traitements disponibles n’ont pas aidé et Patricia est décédée le soir du 1er octobre à l’âge de vingt-cinq ans.”
<https://www.ostravan.cz/81552/zemrela-patricia-janeckova-1998-2023-andelsky-talent-ktery-nestacil-plne-rozvinout-sva-kridla/>
- (65) Wedding Part One. <https://youtu.be/c5dKIEqrwnk>
- (66) “Zemřela Patricia Janečková (1998-2023) : Andělský talent, který nestačil plně rozvinout svá křídla (C’était un talent angélique qui ne suffisait pas à développer pleinement ses ailes, mais elle a fait de son mieux pour son choix.)”
<https://www.ostravan.cz/81552/zemrela-patricia-janeckova-1998-2023-andelsky-talent-ktery-nestacil-plne-rozvinout-sva-kridla/>
- (67) “Mais elle a développé ses ailes lorsqu’elle était enfant et a accompli plus que beaucoup d’autres dans sa vie. Et maintenant elle au ciel.” *op. cit.*
- (68) “Patricia Burda Janečková a quitté ce monde prématurément à l’âge de vingt-cinq ans et a laissé derrière elle une marque brillante et indélébile. On se souviendra toujours de son art comme d’un éclair éblouissant de talent génial et d’un témoignage d’une jeune artiste incroyablement travailleuse, responsable et polyvalente.” *ibid.*
- (69) Patricia Janečková & Eva Dřízgová-Jirušová ; Canzonetta sull’ aria (W. A. Mozart)
<https://youtu.be/d4s5VHIAwDw>
 Pěvecký recitál 24. 4. 2021 - E. Dřízgová-Jirušová, P. Janečková et A. Farana. Slovo: M. Kociánová.
https://youtu.be/-kgXyWa_SDo
- (70) <https://www.ostravan.cz/17618/patricia-janeckova-dobyla-rim-a-rika-chci-aby-me-zpev-provazel-celym-zivotem/>
- (71) チェコ語地名では Jaroměřice nad Rokytnou。
- (72) Pěvecký recitál 24. 4. 2021 - E. Dřízgová-Jirušová, P. Janečková a A. Farana. Slovo: M. Kociánová.
https://youtu.be/-kgXyWa_SDo
- (73) ちなみに、オッフエンバックの「ホフマン物語」は、ラクメ (Lakmé) 初演の2年程前の1881年2月10日に、同じ劇場であるパリのオペラ・コミック座で初演されている。
- (74) “J’essaie toujours de choisir un répertoire qui lui permette d’évoluer progressivement et sans force, sans l’obliger à changer ou déformer sa voix. Les compositions oratoires et les œuvres à thèmes spirituels que nous avons sélectionnées, qui conviennent parfaitement à Patricia, répondent exactement à ces critères et, à mon avis, l’aident également dans sa croissance et sa maturation artistique”
<https://www.denik.cz/hudba/patricia-janeckova-maly-rimsky-zazrak-20141114-5n8o.html>
- (75) *cf. ex.* Le chef Tugan Sokhiev démissionne du Bolchoï et de l’Orchestre du Capitole, publié le lundi 7 mars 2022 à 10h32.
<https://www.radiofrance.fr/francemusique/le-chef-tugan-sokhiev-demissionne-du-bolchoi-et-de-l-orchestre-du-capitole-5904362>
cf. ex. Le chef d’orchestre russe Tugan Sokhiev démissionne de tous ses postes à Moscou et à

Toulouse - Le directeur musical du Théâtre du Bolchoï et de l'Orchestre national du Capitole se dit contraint de démissionner, victime de la « culture d'annulation », publié le 7 mars 2022 à 09h14.

https://www.lemonde.fr/culture/article/2022/03/07/le-chef-d-orchestre-russe-tugan-sokhiev-demissionne-de-tous-ses-postes-a-moscou-et-a-toulouse_6116429_3246.html